

時空理論／5次元航法

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

5次元航法とは、SF のワープ航法や、テレポーテーションに類似のものである。

我々が、宇宙旅行を模索するとき、最も障害となるのは、その距離である。

最も近い恒星は、ケンタウルス座の α 星で、4.3 光年。

青く美しいシリウスまでは、8.5 光年。

最も近い銀河は、アンドロメダ銀河で 230 万光年。

物理空間を、まともに航行したのでは、1 光年でさえ、気の遠くなるような年月を必要とする。

隣の恒星まで、数百年も要するのでは、話にならない。

宇宙旅行を現実にするためには、原始的なロケット推進ではだめで、もっと効果的な方法を、探さなければならない。

誰も知らない近道がある、それは、5次元方向である。

物理的距離は、絶対的なものではない

数時間で、何千光年、何万光年を飛び越えて、アンドロメダ銀河へ行こう。

§1 5次元時空の実在性

僕が書いた別書「時空理論／物体の大きさ」において、

「物体は、その時空ポテンシャルによって、大きさが変化する」と述べた。

その時空ポテンシャルは、時空ベクトル A_i (電磁ポテンシャル) の線積分によって、与えられる。

これを利用して、例えば、乗用車をタンカーの大きさに、変えたとしよう。

タンカーの大きさになった乗用車は、我々と同じ空間に、とどまるだろうか？

たぶん、否である。

この乗用車は、我々の目の前から、忽然と消えてしまうだろう。

4次元的には、我々と同じ空間を占めているのだが、5次元方向へ移動したのである。

この乗用車は、長さが元の 100 倍になっている、中の乗員もそうである。
 逆に、この乗用車から我々を見ると、我々が、1/100 になっている。
 外界の距離が、1/100 になったのである。

この 1/100 を、 $1/(9.5 \times 10^{13})$ にしたら、どうなるか？ (1 光年 = 9.5×10^{12} km)

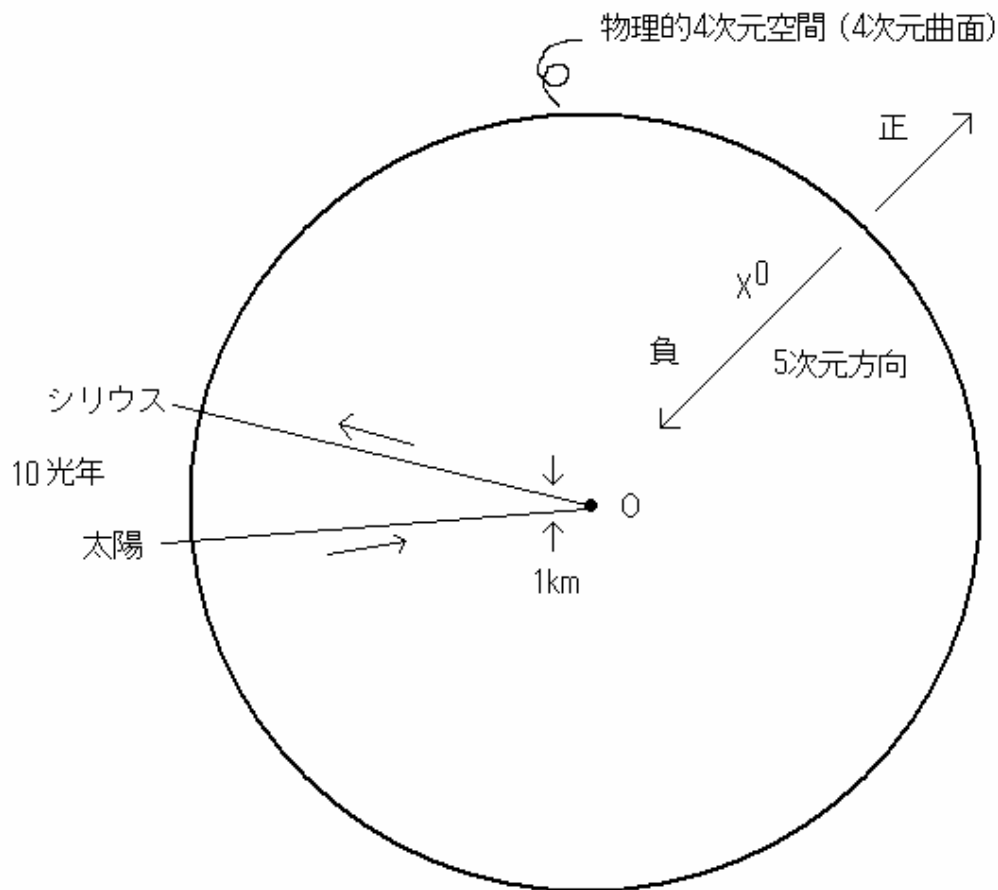
10 光年を 1km にできるだろう、シリウス星まで 1km になる。

歩いて 15 分の距離である。

シリウス星の近くまで来たら、今度は、乗用車の時空ポテンシャルを、変化の前に戻す。

これによって、通常の物理的世界へ、また舞い戻る。

我々の目の前には、青く美しいシリウスが輝いていることだろう。



● 今述べたことを、もう少し数学的にやってみよう。

別書「時空理論／物体の大きさ」を参考にされたい。

時空 (x^i, G_{ij}, A_i) において、我々の宇宙船が、座標 (x^i) 上の 2 点 P, Q 間を航行するとしよう。

時空理論によれば、宇宙船が体験する 2 点 P,Q 間の距離 L_{PQ} は、次式で与えられる。

$$L_{PQ} = \int_P^Q \exp(x^0) \sqrt{G_{ab} dx^a dx^b} \quad , \quad a, b = 1, 2, 3$$

線積分は、2 点 P,Q 間の航行路に沿って行う。

この式で、 x^0 が負の大きな数になれば、 $\exp(x^0)$ は非常に小さな数になり、その結果、距離 L_{PQ} も、どんどん小さくなる。

すなわち、5 次元方向 x^0 をうまく利用すれば、航行路の物理的距離を小さくできる。

この距離 L_{PQ} は、宇宙船の長さを基準にした距離であるから、まさに宇宙船の航行距離が短縮される、ということである。

「時空理論／物体の大きさ」では、これを‘物体計量’と呼んでいる。

ちなみに、この宇宙船内部の経過時間(固有時)は、次式で与えられる。

$$T = \int_P^Q \exp(x^0) \sqrt{G_{ij} dx^i dx^j} \quad , \quad i, j = 1, 2, 3, 4$$

●では、このような方法が本当に可能だろうか？

§2 に、まとめて書いたが、1943 年に、アメリカのペンシルベニア州で、ある大規模な実験が、秘密裏に行われた。それは、フィラデルフィア実験と呼ばれている。

そこで、本当に駆逐艦のテレポーテーションが起きたという。

これは、映画にもなっていて、何年か前に、テレビ放映されたのを見た記憶がある。

多くの人は、これを‘トンデモ’（語源は‘とんでもないもの’だそうだ）だと思うだろうが、

フィラデルフィア実験を色々調べてみると、時空理論の結果とも符号する点がある。

また、カナダの発明家ジョン・ハチソンが発見した‘ハチソン効果’とも、多くの共通点がある。

ハチソン効果の方は、もっと小規模であるが、発生した現象が酷似している。

フィラデルフィア実験とハチソン効果とは、時代的に隔たりがあり、独立したものである。

これらから、フィラデルフィア実験は、まったくのデタラメではなく、真実かもしれない、と思えるのである。

こんなことを書くと、時空理論そのものがトンデモではないか、と疑う人がいるかもしれないが、そういう人は、時空理論(本体)の第 2 章までを読みたい。

●ひとつ心配なことは、物体が 5 次元方向へ大きく移動したときに、物体として正常な形を保っていられるだろうか？ である。

分子・原子レベルで分解したり、しないだろうか？

§2 フィラデルフィア実験

インターネットや書籍等で調べたところによると、

1943年に、アメリカのペンシルベニア州フィラデルフィアで、駆逐艦「エルドリッジ」を用いて、ある大規模な実験が秘密裏に行われた。

当初の目的は「艦をレーダーに対して不可視化する」というものらしかった。

エルドリッジの艦内には、電磁場発生装置や多くの電気実験機器が搭載されており、強力な電磁場が艦を包むしかけになっていた。

スイッチを入れると、船体は緑色のモヤに包まれ、レーダー上から消えた。

ここまでは参加者達の予想通りであったが、突然、次のようなテレポーテーション現象が起きた。

実験の開始と共に、海面から緑色の光がわきだし、船体を覆ったと思うと、船は目の前から消えてしまった。そして1600km離れたノーフォークに瞬間移動し、そしてまた、フィラデルフィアに瞬時に戻ってきた。

船内の乗組員は、行方不明、透明化、凍結、火だるま、発狂、体の裏表が逆転、壁や床に同化など、奇怪な現象が起きたという。

唯一、機械室にいた技術者達が、鉄の隔壁に守られ影響を受けなかったという。ここが司令室だったということだろう。

こうして、行方不明死亡16人、発狂者6人という犠牲に驚いた海軍は、この実験を隠蔽したといわれている。

2014年7月 Ver1.0 発行

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2014年